



埼玉県のマスコット コバトン

河を制す—戦国武将と大河—

開催期間 : 平成28年10月4日(火)～平成29年1月22日(日)
場 所 : 埼玉県立熊谷図書館2階ロビー

戦国時代において、大河は武将の支配領域を形作る国境でした。河を制することは戦国武将にとって重要な問題であり、河は戦国時代の争いや治世において重要な要素となっています。今回はそんな「戦国武将」と「大河」の関係をテーマに、特に上武国境地域(現在の埼玉県と群馬県の県境。熊谷市・行田市・深谷市と群馬県の一部地域が該当)を中心とした武将と河に関する資料をご紹介します。

1 河を制す

戦国時代において大河は、武将たちの陣地を守る天然の防壁であり、武将たちの支配領域を形作る天然の国境ともなりました。一方で、武将が相手の領地を攻める際、河を上手く渡ることができれば相手への奇襲となり、また攻城の際には水攻めに用いるなど河を強力な武器とすることもできました。それゆえ、河をどう利用するかは武将たちにとって重要な問題であり、当時の戦国武将たちと河の関係についての研究も数多くなされています。

1-1. 戦国武将と「越河(えっか)」

関東平野最大の障壁であった利根川を渡ることを戦国期には「越河(えっか)」と表現されていました。「越河」という表現を用いた当時の文書は数多く存在しており、「越河」はある武将だけが用いた限定的な用語ではなく、社会的に通用する熟語となっていたと考えられています。

では、戦国武将たちはどうやって越河していたのでしょうか。軍事行動して大人数で渡る際の一般的な方法とされているのは、多数の小舟を連結させて渡る舟橋でした。少人数である場合は、渡船が一般的で、比較的浅い場所においては騎馬での瀬渡りも行われていました。また、越河の際は身動きが不自由になり大きな隙を生じさせるので、越河前後の道作りや舟橋の警護、軍旗を物主の1本に減らす指示など周到な準備をして臨んでいたことが現存している文書からわかっています。利根川の水量を観察していたという記録も残っているようです。

武将が河を簡単に渡れないように厳しく管理した例もありました。館林城の長尾頭長に勝利した北条氏邦が、頭長に赤岩・酒巻の渡船の運航を禁止し、舟橋一か所のみをかけて厳しく管理するように命じたという文書も残っています。

また、越河に関するエピソードとして、天正2年に武蔵国羽生城の救援に来た上杉謙信であったが、利根川が融雪によって増水し、渡れずに立ち往生したということが文書に残っています。一方、攻める北条方も渡る瀬がなく羽生城に十分に到達できないことを白河氏に文書で報じていました。双方が越河できなかったことで一戦が水に流れたということがあったのです。

【参考資料】

210. 4/チ 『中世東国の道と城館』 齋藤慎一著 東京大学出版会 2010
213/か 『関東平野の中世』 築瀬大輔著 高志書院 2015
S204/セ 『戦国期東国の都市と権力』 市村高男著 思文閣出版 1994 **【貸出不可】**
雑誌 加藤哲 「越河」—領域を区切るもの— 『戦国史研究』 第40号 吉川弘文館 2000
【貸出不可】

1-2. 国衆（くにしゅう）と戦国大名

今展示の資料に多く見られる「国衆（くにしゅう）」という言葉があります。国衆とは、一般的には南北朝～戦国時代の地方の荘官、地頭、名主など在地領主を指す言葉で、「国人（こくじん）」とも呼ばれます。戦国時代における国衆は、「家中」や「洞（うつろ）」と呼ばれるような自身の家臣団を持ち、また自身の領地内に対して裁判権や立法権を含めた公的な領域支配を行っていました。

国衆は、隣り合った他の大領主、「戦国大名」と呼ばれる勢力の傘下に入ることもあり、状況によっては他の勢力に鞍替えすることもあったとされています。

「国衆」と「戦国大名」はどちらも戦国時代の武家を指す言葉として用いられ、自身の家中を持ち、公的で広域的な領主権力を持った存在ですが、政治的・軍事的に完全に独立した存在を特に「戦国大名」と表すのが一般的な使い分けのようです。

しかし、この「国衆」や「戦国大名」という存在については現在も研究され、様々な定義付けが為されています。また、「戦国領主」や「地域領主」など論文内で他の言葉と使い分けることもあります。資料に当る際は、その著者がどう定義しているのか、どう表記しているのかに注意することが必要です。

上武国境地域の戦国武将と主要な城

後北条氏…関東を支配した戦国大名。北条氏邦は鉢金城を居城とした。
武蔵成田氏…忍城主。
岩付太田氏…岩槻城主。
武蔵上田氏…松山城主。
木戸氏…羽生城主。
深谷上杉氏…深谷城主。
上野新田氏・岩松氏…金山城主。

鉢形城…現大里郡寄居町鉢形、崖端城。
忍城…現行田市本丸、平城。
岩槻城…現さいたま市岩槻区太田、平城。
松山城…現比企郡吉見町北吉見、丘城。
羽生城…現羽生市東、平城。木戸氏の後は成田氏領に。
深谷城…現深谷市仲町、平城。
金山城…現群馬県太田市金山町、山城。

【参考文献】

210. 47/セ 『戦国大名と外様国衆 戎光祥研究叢書 第4巻』 黒田基樹著 戎光祥出版 2015
210. 47/セ 『戦国期東国の大名と国衆』 黒田基樹著 岩田書院 2001
210. 47/セ 『戦国大名論 暴力と法と権力 講談社選書メチエ607』 村井良介著 講談社 2015

【その他国衆に関する展示資料】

210. 47/ロ 『論集戦国大名と国衆 3 北条氏邦と猪俣邦憲』 浅倉直美編 岩田書院 2010
210. 47/ロ 『論集戦国大名と国衆 7 武蔵成田氏』 黒田基樹著 岩田書院 2012
210. 47/ロ 『論集戦国大名と国衆 12 岩付太田氏』 黒田基樹著 岩田書院 2013
210. 47/ロ 『論集戦国大名と国衆 15 武蔵上田氏』 黒田基樹著 岩田書院 2014
210. 47/ロ 『論集戦国大名と国衆 19 北条氏房』 黒田基樹著 岩田書院 2015
210. 47/テ 『定本・北条氏康』 藤木久志・黒田基樹編 高志書院 2004
213/キ 『北関東の戦国時代』 江田郁夫・築瀬大輔編 高志書院 2013
213/セ 『戦国史研究叢書 10 戦国期東武蔵の戦乱と信仰』 加増啓二著 岩田書院 2013
213/コ 『戦国史研究叢書 11 後北条氏の武蔵支配と地域領主』 井上恵一著 岩田書院 2014
213. 4/メ 『武蔵武士と戦乱の時代』 田代脩著 さきたま出版会 2009

288. 3/コ『シリーズ・中世関東武士の研究第3巻 上野新田氏』田中大喜編著 戎光祥出版 2011
 288. 3/コ『シリーズ・中世関東武士の研究第15巻 上野岩松氏』黒田基樹編著 戎光祥出版 2015
 288. 3/セ『戦国北条氏五代の盛衰』下山治久著 東京堂出版 2014
 288. 3/セ『中世武士選書 第8巻 戦国北条氏五代』黒田基樹著 戎光祥出版 2012
 289. 1/ホ 015『北条氏康の子供たち 北条氏康生誕五百年記念論文集』黒田基樹・浅倉直美編
 宮帯出版社 2015

【以下貸出不可】

- R288. 9/セ『戦国武将「旗指物」大鑑』加藤鐵雄著 彩流社 2010
 S204/セ『戦国の城』埼玉県立歴史資料館編 高志書院 2005
 S204/チ『中世北武蔵の城 城郭資料集成』梅沢太久夫著 岩田書院 2003
 S263/ハ『中世武士選書 第3巻 羽生城と木戸氏』富田勝治著 戎光祥出版 2010
 S280/キ『北武蔵を駆け抜けた武将たち』戸島鐵雄著 ブイツーソリューション 2006
 S280/チ『中世武蔵人物列伝 時代を動かした武士とその周辺』埼玉県立歴史資料館編 さきたま出版会 2006
 S280. 8/イ『武蔵武将伝』稲垣史生著 歴史図書社 1980
 S288. 3/オ『深谷上杉家八代記』大澤成四郎著 雄文社 1992
 S288. 3/フ『深谷上杉氏の歴史』深谷上杉顕彰会編 深谷上杉顕彰会 1986
 S288. 3/フ『深谷上杉氏史料集』深谷上杉顕彰会編 深谷市 1996
 S288. 3/ム『武蔵松山城主上田氏 戦国動乱二五〇年の軌跡』梅沢太久夫著 さきたま出版会 2006
 S289/材『戦国武将太田資正 岩付城主、岩付太田氏及び当時の情勢』道野昭壽著 1998
 雑誌『歴史読本特別増刊号 武田信玄・上杉謙信・北条氏康 戦国データファイル』新人物往
 来社 1993

1-3.水攻め

戦国時代において、河を用いた戦法といえば「水攻め」。堤防を作って河川の水を城周辺に流し込み、城一帯を丸ごと水没させることで籠城する相手方に身動きが取れないようにし、支援や補給を立てて飢えさせ、戦意を喪失させる戦法です。川をせき止める為の地理の把握や堤防の建設など準備に時間と労力がかかりますが、強力な戦法です。

水攻めが用いられた有名な戦といえば羽柴（豊臣）秀吉の「備中高松城攻め」と石田三成の「忍城水攻め」です。高松城も忍城も河川の近くにあり、沼地・低湿地に囲まれた環境を守りに活かした平城で、水攻めはそれを逆手に取った戦法でした。

同じ戦法を取った二つの戦法ですが、結果は真逆のものでした。天正10年（1582年）に行われた「備中高松城攻め」では、毛利方清水氏の守る高松城を攻めあぐねていた秀吉が、黒田官兵衛の提案を受け水攻めを採用し、長さ約3km、高さ8メートルの堤防をわずか12日間で完成させて実行しました。5月中下旬という梅雨の季節であったことも重なり増水していた足守川の水を引き入れると、わずか数日で一帯は巨大な人口湖のようになり、高松城は湖上唯一の浮島のように孤立しました。また、梅雨により他の河川も増水していたこともあって毛利方の援軍は高松城に近づけず、城内の者を助けるために毛利方は和議を結ぶ決断をしました。

一方、「忍城水攻め」は天正18年（1590年）に起こった豊臣方の後北条方へ対する「小田原攻め」の中で、石田三成が忍城を攻める際に行われました。周囲が沼と湿地という足場の悪さから三成たちは成田氏の籠城する忍城を攻めあぐねており、陣を張っていた丸墓山古墳から周囲を見渡したところ、備中高松城と似た環境にあったことから三成が水攻めを採用することを決めたと伝えられています。

三成は「石田堤」と呼ばれる全長28kmにも及ぶ大きな堤防を忍城の周囲に築かせ、利根川と荒川の水を引き入れることで忍城を水没させようとしたのですが、忍城は沈みきらず、逆に堤防の一部が決壊して石田方に被害が及びました。成田氏方の忍城での籠城は、他の後北条氏方の城が

攻め落とされ、後北条氏が滅亡するまで続けられました。

石田三成の「忍城水攻め」ですが、現在ではこの忍城攻略に水攻めを発案・決定したのは秀吉だったという説が有力となっています。これは秀吉から三成宛の、水攻めの方法や水攻めの絵図提出、戦後処理などについての指示書が数多く現存していることにより明らかにされました。その他の水攻めが行われた戦も秀吉の「紀州太田城攻め」ですので、水攻めは秀吉が好んで用いた戦法であったようです。

このように水攻めは強力ではあるが莫大な費用と時間も含めた大きなリスクの伴う戦法であり、また城一帯を水没させるために周囲の環境に甚大な影響を与えるため、簡単には選択できない戦法でした。秀吉はそんな水攻めを実行することで自身の絶大な権力を見せ付ける、そんな意図があったのではないかと推測されています。

【参考文献】

- 210/杵『忍城合戦の真実 水に浮かぶ難攻不落の城』洋泉社 2012
B217.5/ヒ『備中高松城の水攻め』市川俊介著 日本文教出版 1996
S261/イ『特別展 石田三成と忍城水攻め』行田市郷土博物館 2011 **【貸出不可】**
雑誌『別冊宝島』2159号「地形から読み解く日本の歴史」宝島社 2014 **【貸出不可】**

【水攻めに関する展示資料】

- 913/ワ『のぼうの城』和田竜著 小学館 2007
雑誌『別冊宝島』2326号「竹村公太郎の「地形から読み解く」日本史」宝島社 2015

【以下貸出不可】

- S261/オ『忍城ものがたり』大沢俊吉著 行田市郷土文化会 1971
S261/ギ『行田市郷土博物館研究報告第3集』行田市郷土博物館 1995
S261/ギ『行田・忍城と町まちの歴史』大沢俊吉著 聚海書林 1983
S261/ギ『行田史跡物語 忍城史跡碑五十基案内』大沢俊吉著 歴史図書社 1979
S261/オ『忍城甲斐姫物語』行田青年会議所広報委員会編 行田青年会議所 1995
S261/キョ『行田市史 資料編 古代中世』行田市史編さん委員会編 行田市 2012
S261/オ『目でみる行田史忍城物語』大沢俊吉著 行田市 1973
S288.3/杵『忍成田侍分限帳』田口新吉編著 [田口新吉] 1997
S288/コ『成田記』小沼保道〔編述〕石島儀助編 今津健之助 1940
S288.3/コ『成田記』小沼十五郎保道著 大沢俊吉訳・解説 歴史図書社 1980
S296.1/オ『忍城史跡碑 六十六基金石文集 写真と案内』大沢俊吉著 国書刊行会 1986
ア S261/フ『忍城図 明治6年調製』古市直之進〔作〕埼玉公論社 1935
ア S261/オ『忍城史料』清水雪雄編著 [清水雪雄] 1890

【その他河を制す（戦国武将）に関する展示資料】

- 210.19/セ『戦争の日本史10 東国の戦国合戦』市村 高男著 吉川弘文館 2009
210.4/チュ『中世東国の世界3 戦国大名北条氏』浅野晴樹・齋藤慎一編 高志書院 2008
210.47/コ『川中島の戦 甲信越戦国史』小林計一郎著 銀河書房 1980
210.47/イ『関東合戦記』伊礼正雄著 新人物往来社 1974
210.47/セ『戦国合戦の常識が変わる本』藤本正行著 洋泉社 1999
210.47/セ『戦国合戦ガイド』会田康範・後藤敦著 新紀元社 1993
210.47/セ『戦国史料叢書第2期1 北条史料集』荻原龍夫校注 人物往来社 1966
210.47/セ『戦国武将ガイド』米沢二郎・小山内新共著 新紀元社 1992
2210.47/タ『長篠の戦』高柳光寿著 春秋社 1960
210.48/セ『戦国時代の終焉 「北条の夢」と秀吉の天下統一』齋藤慎一著 中央公論新社 2005

- 210.48/カ『長篠・設楽原の戦い』小林芳春編 小和田哲男／監修 吉川弘文館 2003
 210.49/ニ『日本戦史〔6〕 長篠役』参謀本部編 村田書店 1978
 213/カ『関東戦国史の研究』後北条氏研究会編 名著出版 1976
 213/カ『関東戦国史』千野原靖方著 斎書房出版 2006
 213.3/材『太田市史 通史編 中世』太田市編 太田市 1997
 213.3/セ『戦国史 上州の150年戦争』青木裕美・秋山正典著 上毛新聞社事業局出版 2012
 213.4/N46『鉢形城跡と郷土文化』中里清著 寄居町公民館鉢形分館 1968
 213.4/サ『埼玉の古城址』中田正光著 有峰書店新社 1983
 291/キュ『旧成田領に残る歴史遺産』ものつくり大学横山研究室著 埼玉新聞社 2012
 291/サイ『埼玉の城址30選』西野博道編著 埼玉新聞社 2005
 BM210『松平家四百年の歩み 長篠城より忍城へ』大沢俊吉著 講談社・音羽サービス・センター（製作） 1970

【以下貸出不可】

- R291.3/ム『武蔵国史蹟総覧』一高史談会編 歴史図書社 1978
 S050/ケ『研究紀要第6号』埼玉県立桶川高等学校 1991
 S080/サ『埼玉叢書第2巻』稲村坦元・柴田常恵編 国書刊行会 1970
 S201/キタ『北武蔵の地域形成 水と地形が織りなす歴史像』地方史研究協議会編 雄山閣 2015
 S201/チ『古地図と年表でみる諸国の合戦争乱地図 東日本編（奥羽・坂東・東国・北国・上方・蝦夷地）』谷口研語監修 人文社 2006
 S204/セ『戦国図鑑 Cool Basara Style 特別展』埼玉県立歴史と民俗の博物館編 埼玉県立歴史と民俗の博物館 2015
 S204/セ『戦国武将と神流川合戦』千木良英一著 群馬県商工会連合会 1989
 S204/ハ『多摩歴史叢書3 八王子城主・北条氏照』下山治久著 たましん地域文化財団 1994
 S204/サ『八王子城主北条氏照文書展』埼玉県立文書館編 埼玉県立文書館 1986
 S204/マン『まんが滝川一益と神流川合戦』田中正雄漫画 山崎誠監修 新町商工会 1998
 S204/ナ『武蔵鉢形城』中里清著 [埼玉県立熊谷図書館（製作）] [19-]
 S204/フ『武蔵武士 そのロマンと栄光』福島正義著 さきたま出版会 1990
 S204/ナ『武蔵鉢形城』中里清著 [埼玉県立浦和図書館（製作）] 1988
 S205/ト『富田勝治論文集 羽生及び附近の諸城』富田勝治〔著〕 1989
 S250/モ『神流川合戦の研究』茂木藤太郎〔著〕 1965
 ア S210.47/テ『天正記』〔書写者不明〕〔書写年不明〕
 雑誌『別冊太陽』「今むかし日本の名城88 東日本編」 平凡社 2012
 雑誌『別冊太陽』「大図解戦国史」 平凡社 2014
 雑誌『別冊宝島』2129号「地図で訪ねる戦国10大決戦場」 宝島社 2014
 雑誌『別冊宝島』2160号「完全図解日本戦国史」 宝島社 2014
 雑誌『日本歴史』790号 吉川弘文館 2014
 雑誌『日本歴史』795号 吉川弘文館 2014
 雑誌『歴史街道』2007年7月号 PHP 研究所 2007
 雑誌『歴史街道』2008年4月号 PHP 研究所 2008
 デジタルライブラリー『武蔵一国之図』 [17-]

2 埼玉県の大河

上武地域の国境であった利根川、そして埼玉県の中央を流れる荒川。どちらの河も古くから人びとの暮らしに深く結びついていた重要な「大河」です。

ここでは、それぞれの河の歴史や文化に関する資料をご紹介します。

2-1. 埼玉県の利水と治水（利根川東遷・荒川西遷）

古来、利根川は、江戸湾（現在の東京湾）に河口が存在していました。現在の茨城県神栖市と千葉県銚子市堺に河口が移ったのは、徳川家康が開始した利根川東遷事業によって人工的に流れを変えた結果です。

埼玉県、特に沖積低地である県東部は、かつては利根川や渡良瀬川、思川、荒川（現綾瀬川・元荒川）が乱流する広大な沼沢地でした。鎌倉時代には、関東武士団がこの地に進出してこの一体を水田として開発しましたが、自然堤防を巧みに利用しながらの整備で、大河の開発とまではいかなかったようです。そして江戸時代の初期、これらの蛇行している大河川の河道をまっすぐにし、舟運路網を確立するための一大土木事業が行われました。

天正18年（1590年）に江戸に入った徳川家康は、関東郡代に伊奈備前守忠次を任命し、利根川東遷事業を行わせました。事業は文禄3年（1594年）から60年の歳月をかけて、忠次から数代にかけて受け継がれ、承応3年（1654年）に赤堀川へと水が渡ったとされています。これによって、わが国最大の流域面積を誇る現在の利根川の原型が誕生したのです。また、赤堀川は開削された河道は関東ローム層の赤土を掘って作られたことからその名が付けられました。

一方、荒川については、寛永6年（1629年）に伊奈半十郎忠治が中心となって、熊谷扇状地直下流の久下で人口開削して、流路を入間川の支流に結びました。これにより、荒川は入間川水系と合流し、隅田川の最上流となりました。荒川の開発事業は、利根川東遷に対して、荒川西遷事業とも呼ばれています。

徳川家による河川開発事業の主な目的は、水運確保の工事であるとされています。江戸時代において、江戸を中心とした水運網が次々と確立され、信濃や越後の物資を運ぶために利根川河道が用いられました。一方で、新たに開削された河川における水害はたびたび発生しており、赤堀川を初めとする河川の開削はその後も続けられていました。天明3年（1783年）に浅間山の大噴火が起こり、その降砂が大量に利根川に流れ込んだことで河道が一変したことで、新たな利根川東遷事業が開始されました。その過程で赤堀川が拡張されて本格的に現在の流路が形作られました。

利根川・荒川の河川改修事業は江戸から明治へ、そして昭和まで続いていきました。

【参考資料】

- 213/ト『利根の変遷と水郷の人々』鈴木久仁直著 崙書房 1985
291.34/サ『埼玉平野の成立ち・風土』松浦茂樹著 埼玉新聞社 2010

【埼玉県の利水と治水に関する展示資料】

- 213/C43『河川をめぐる歴史像』地方史研究協議会編 雄山閣出版 1993
213/カ『河川水運の文化史』川名登著 雄山閣出版 1993
213/ト『利根川』本間清利著 埼玉新聞社 1978
291.3/キ『利根川 自然 文化 社会』九学会連合利根川流域調査委員会編 弘文堂 1971
291.34/ト『利根川物語 風土と歴史を歩く』渡辺良夫著 御園書房 1991
602.1/ト『利根川上流地域の開発と産業』高崎経済大学附属産業研究所編 日本経済評論社 1991
614.2/リ『利根川流域における農業水利の展開と農業発展』関東農政局計画部計画課編 農林省関東農政局 1965
684/ジ『第43回企画展図録 上州利根川の水運』群馬県立歴史博物館編 群馬県立歴史博物館 1992

【以下貸出不可】

- R291. 3/トネ『利根川荒川事典』 利根川文化研究会編 国書刊行会 2004
S261/キヨ『行田市史 資料編 近世1』 行田市史編纂委員改編 行田市 2010
S290/カ『利根川流域の自然と文化 民俗・考古・美術』 関東地区博物館協会編 茨城新聞 1983
S290/ヨ『崙書房名著影印叢書3 利根の変遷と江戸の歴史地理』 吉田東伍著 崙書房 1974
S290. 1/アラ『荒川流域ものがたり 上巻 源流から荒川の西遷と秩父鉄道沿線』 大井莊次著 埼玉新聞社 2010
S517/コ『荒川・多摩川・鶴見川・相模川 その治水と利水』 建設省関東地方建設局編 国土開発調査会 1986
S517/ミ『荒ぶる川の恵み 滝沢ダムものがたり』 水資源協会 1996
S517/タ『川の変遷と村』 玉城哲著 論創社 1984
S517/コ『利根川 その治水と利水』 佐藤俊郎著 国土開発調査会 1981
S517/モ『利根川事典』 森田保編 新人物往来社 1994
S517/ト『利根川の歴史 源流から河口まで』 金井忠夫著 日本図書刊行会 1997
S517/コ『利根川百年史 治水と利水』 利根川百年史編纂委員会編 国土開発技術研究センター編 建設省関東地方建設局 1987
S517. 2/トネ『利根川東遷』 澤口宏著 上毛新聞社 2000

2-2.利根川図志

『利根川図志』は、利根川流域の歴史、風俗、民間伝承、神社、仏閣、生息する動植物などを、多くの文献を駆使しながら、詩歌、俳句、数十枚に及ぶ絵図を交えて多彩に紹介した作品です。巻頭には利根川全図が掲載され、布川を中心とした利根川の中流・下流域、特に印旛沼や銚子付近について詳述されています。

著者の赤松宗旦は医者ですが、参考文献の引用も豊富で、利根川周辺の社寺それぞれに対する信仰の実態や行事祭礼について詳細に記録されています。また、綿密な調査・観察によって動植物や漁法について描写されており、現在でも利根川流域の民俗調査には不可欠の基礎文献とされています。柳田国男もその影響を受けているとされており、彼によって解題も書かれています。

また、多彩で当時の風景を彷彿とさせるような挿絵もこの『利根川図志』の魅力とされており、この挿絵は著者が数名の画家に依頼をして書かせたことが「雑話」の中で述べられています。その画家の一人として、葛飾北斎の名が記されていますが、有名な初代葛飾北斎の没年と『利根川図志』の出版年に開きがあることから、2代目北斎である可能性が高いことが柳田国男の解題を初め、その他研究書で指摘されています。

【参考資料及び利根川図志に関する展示資料】

- デジタルライブラリー『利根川図志』 赤松宗旦著 1855
382. 1/モ『『利根川図志』と柳田国男』 守屋健輔著 崙書房 1983
291. 3/ア『利根川図志 坂東太郎の流域紀行』 赤松宗旦著 津本信博訳 教育社 1980
S289/アカ『評伝赤松宗旦 「利根川図志」が出来るまで』 川名登著 彩流社 2010 【貸出不可】
S290/ト『利根川図志紀行』 黒川雅光/写真 森田保/文 聚海書林 1986 【貸出不可】

【その他埼玉の大河に関する展示資料】

210. 02/To46『荒川沿岸地区における考古学的調査 東京都埋蔵文化財調査報告 第3集』 東京都教育庁社会教育部文化課 1976
213. 4/ア『荒川 その土と心』 朝日新聞浦和支局編 朝日ソノラマ 1977
291. 3/キ『切り絵利根川の旅』 後藤伸行/切り絵 岡村直樹/文 オリジン社 1994
291. 3/I27『続利根川』 飯島博著 三一書房 1959
291. 3/Y66『利根川』 安岡章太郎著 朝日新聞社 1966

- 291.3/I27『利根川』 飯島博著 三一書房 1958
 291.3/I95『利根川-空からみた 岩波写真文庫136』 岩波書店編集部編 岩波書店 1955
 291.3/ト『利根川水源紀行』 奥利根山岳会編 煥乎堂 1980
 291.3/ト『利根川百景』 吉水十果著 崙書房 1982
 291.3/ト『利根川百景ガイドブック』 利根川百年記念行事委員会監修 河川情報センター 1989
 291.3/ト『利根川流域五十山 利根川叢書3』 我孫子登山倶楽部編著 崙書房出版 1991
 291.35/カ『利根川をゆく 3』 片山正和著 崙書房 1979
 291.35/N19『利根川読本 東葛流山研究 第11号』 流山市立博物館友の会編 流山市立博物館友の会 1992
 684/カ『河岸に生きる人びと』 川名登著 平凡社 1982
 684/ワ『船頭 利根川水運の人びと』 渡辺貢二著 崙書房 1979
 684/ト『利根川汽船航路案内』 汽船荷客取扱人联合会編 崙書房 1972
 684/ト『利根川高瀬船 利根川叢書1』 渡辺貢二著 崙書房出版 1990
 910/ア『荒川流域の文学 埼玉をめぐる人と作品』 埼玉文芸家集団刊行委員会編 さきたま出版会 2006
 BM291『川のガイドブック 川を歩く 隅田川・荒川』 リバーフロント整備センター編 学芸出版社 2000
 BM291『荒川 169キロのみちのり』 毎日新聞浦和支局編 さきたま出版会 1996
 BM517『荒川新発見』 東京新聞「荒川」取材班・井出孫六共著 東京新聞出版局 2002
 D291.3/ア『荒川 写真集』 埼玉県編 埼玉県 1987

【以下貸出不可】

- R291.3/トネ『利根川流域文化地名ノート 上』 石野武男著 創英社 2012
 R291.3/トネ『利根川流域文化地名ノート 下』 石野武男著 創英社 2012
 S290/オ『大利根百話』 建設省関東地方建設局編 関東建設弘済会 1987
 S290/ト『利根川 PHOTO TOPOGRAPHY』 堀内敬一著 ティビーエス・ブリタニカ 1995
 S290/ケ『利根川ハンドブック』 建設省関東地方建設局編 建設省関東地方建設局 1988
 S290.1/サ『荒川総合調査報告書2 荒川 人文』 埼玉県編 埼玉県 1987
 S290.1/ア『荒川ものがたり2 子供たちに残したい私たちの荒川』 秩父青年会議所編 秩父青年会議所 1995
 S290.1/サ『荒川関係文献目録1』 埼玉県県民部県史編さん室編 埼玉県県民部県史編さん室 1983
 S290.1/サ『荒川関係文献目録2』 埼玉県県民部県史編さん室編 埼玉県県民部県史編さん室 1985
 S290.1/アラ『荒川流域ものがたり 下巻 岩淵水門・隅田川から臨海副都心』 大井莊次著 埼玉新聞社 2010

展示資料とリストについて

- 展示資料のリストは（請求記号 書名 著者名 出版者 出版年）の順で掲載されています。所蔵館の記載のないものは、熊谷図書館所蔵です。
- このリストに掲載されている県立図書館資料は、展示期間中貸出ができません。
貸出は展示終了後から行います。予約は一部資料を除きまして可能ですので、カウンターの職員にお尋ねください。（請求記号の後に【貸出不可】とついているものは館外貸出ができません。）

